# とやま、祭り彩時季【十一】

冬から春にかけての祭礼と行事　写真・文／木原盛夫

# とやま、祭り彩時季【十一】

冬から春にかけての祭礼と行事　写真・文／木原盛夫

CONTENTS


◯伊勢玉神社の火祭・・・・・・・・・・4P
◯勝興寺の御満座法要・・・・・・・・・11P
【コラム】柿葺きと檜皮葺き・・・・・16P
◯入善町上野の塞の神まつり・・・・・25P
◯宝徳寺の寒中水行・・・・・・・・・・35P
◯大岩山日石寺の寒修行・・・・・・・・42P
◯宝樹寺の数珠繰り・・・・・・・・・・55P
◯愛宕社（魚津神社）の火祭り　・・・57P
◯小川寺の宮田（みやでん）・・・・・67P
◯節分祭・・・・・・・・・・・・・・・77P
【コラム】富山のみの市・・・・・・・・84P
◯南砺利賀そば祭り・・・・・・・・・・88P
【コラム】利賀の丑曳きと・・・・・・94P
井波の木遣り町流し
◯氷見の起舟・・・・・・・・・・・・・96P
◯城端の「つごもり大市」・・・・・・102P
【コラム】下立（おりたて）の・・・・107P
流灌頂と粕塚

◯旧大沢のに残る湯釜神事・・・・・・110P
◯村境の神・・・・・・・・・・・・・・123P
◯参考文献・・・・・・・・・・・・・・135P
◯祭りの日・・・・・・・・・・・・・・139P
（或は、そこに在ったはずの風景）
◯プロフィール・・・・・・・・・・・・143P

## ◯伊勢玉神社の火祭

小正月には河原や田んぼ、学校のグランドなどに櫓（やぐら）を組んで、お正月に飾った門松やしめ縄、書き初めなどを持ち寄って焼き、その燃え上がる火で焼いたお餅を食べて無病息災や家内安全を願う左義長が行なわれる。民俗学的には門松やしめ飾りで出迎えた歳神を、それらを焼く事で炎と共に見送る意味があるという。

１月１５日を小正月とするのが一般的だが、１４日から１６日までの３日間、あるいは１４日の日没から１５日の日没までを小正月とすることもある。

伊勢玉神社の火祭は１４日の１８時から斎行される。社殿で神事が行なわれ、宮司が忌火（いみび）をきる。忌火は行燈に入れられ境内に造られた左義長に点火される。

参拝客は拝殿でいただいた延命餅を、一年間無病息災で過ごせるようにと願いながら、燃え盛る左義長の火で炙る。

5P上：境内に造られた櫓に、持参した正月飾りを積み重ねる参拝客。
5P下：拝殿では参拝客に延命餅が配られる。
6P：火祭の神事。宮司が左義長に点火する忌火をきる。
7P上：忌火を移した行燈を手に、左義長の前で祝詞を奏上する。
7P下：忌火が左義長に点火される。
8－9P：左義長を囲み、延命餅を焼く参拝客。

T11-006

１０Ｐ：餅を吊るした竿を火にかざして焼く。この火で焼いた延命餅を食べると、一年間無病息災で過ごせるという言い伝えがあるそうだ。



○勝興寺の御満座法要

１月１５日・１６日に営まれる、伏木にある浄土真宗のお寺、雲龍山勝興寺の御満座法要。

御満座法要とは御正忌報恩講のことで、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人の命日にその遺徳を偲んで行われる法会。御満座そのものは、法会の終わる最後の日という意味のようだ。親鸞聖人の命日は１１月２８日だが、大谷派（東本願寺）は１１月２１日から２８日で行ない、本願寺派（西本願寺）は新暦に直して１月９日から１６日に行うそうだ。大谷派（お東）は１１月２８日が御満座、本願寺派（お西）は１月１６日が御満座となる。

デカローソクに火が灯されることで有名だが、実は下の大きな部分は木造で、蝋燭は上に出た部分だけだ。<明治時代に１年交代で法要のろうそくを提供してきた勝興寺周辺の高町と下町がろうそくの寸法を間違えて作ったことを機に、大きさを競い合うようになり、巨大化したと伝えられる。戦後は伏木の船大工が木のデカローソクを制作し、木製になっ

たおかげで毎年繰り返し使い、デカローソクの大きさは一定になった>と富山新聞社の『暮らしの歳時記　富山編』に書かれている。

北陸では御満座の行われる頃は季節風が吹き、雷も鳴って天候が荒れることから御満座荒れという言葉もある。

１２P：内陣の両端に置かれたデカローソク。
１３P上下：覚円寺（射水市）の青木哲静住職による法話と、恩徳讃の合唱。

１４P上下：午前のお務めが終わり、みんなでお斎をいただく。

勝興寺の歴史は１４７１年（文明２）に蓮如上人が砺波郡蟹谷庄土山に開いた土山御坊に始まり、蓮如の子孫が代々住職を勤めた。１４９４年（明応３）に蟹谷庄高木場へ移転したが、火災により焼失。１５１７年（永正１４）に、佐渡にあった順徳天皇御願の寺を再興し相続して勝興寺と称した。

戦国時代は瑞泉寺と並んで越中一向一揆の拠点となり、幾度か移転した後、１５８４年（天正１２）に現在の場所に移った。

本堂と唐門ほか１２の建造物が国指定重要文化財となっているが、建造されて２００～３００年経ったものも多く損傷が激しいことから、平成の大修理として平成１０年度から２３ヶ年計画で保存修理事業が行なわれている。

## 【コラム】柿葺きと檜皮葺き

日本の伝統的な屋根の葺き方に柿（こけら）葺きと、檜皮（ひわだ）葺きがある。

柿葺きはヒノキ科常緑針葉樹のサワラやスギの幹を２～３mmに薄く割った板を重ね、竹の釘で固定する。桂離宮の書院や金閣寺、銀閣寺でも使用されている。檜皮葺きはヒノキの樹皮を重ねながら竹釘で固定する。出雲大社の本殿や清水寺、善光寺の本堂で使われているそうだ。富山の神社・仏閣でも、この古来から伝わる技法を用いた屋根を見ることができる。

高岡市にある瑞龍寺の総門、山門、禅堂、大庫裏、回廊、大茶道は柿葺きだ。現在は銅板葺きの法堂（はっとう）も、元々は柿葺きだったそうで、こちらも復元修理の計画がある。瑞龍寺の大修理は１９８５年（昭和６０）から続いているが、最終的には鉛瓦葺きの仏殿（こちらも元は柿葺きだったようだ）以外は、柿葺きになるのだろうか。

１７P上左：瑞龍寺の総門。１７P上右：二重門となっている山門。１７P下左：禅堂と回廊。
１７P下右：法堂にはこれから葺く柿板が用意され、一口千円の御志納を募っている。
１８P上：瑞龍寺山門の柿葺きを俯瞰から。
１８P下：岩峅寺の雄山神社の本殿。

岩崎寺にある雄山神社（前立社壇）の本殿は、明治３９年に国の重要文化財に指定されている。こちらの屋根は元々柿葺きだったそうだが、現在は檜皮葺きになっている。

伏木の勝興寺は平成１０年から大規模な修理が行なわれていたが、それも現在はほぼ終了。鼓堂、宝蔵、書院、奥書院、大広間、経堂など柿葺きの屋根が観覧できる。特筆すべきは唐門で、こちらの屋根は２０１４年に銅板葺きから元々の檜皮葺きに復元された。檜皮の質感と唐破風の曲線がなんとも美しい。

また、書院と奥書院、大広間の屋根は上下に分かれている。錏葺き（しころぶき）又は錏屋根と言うそうだが、これは幕府が出した建物の奥行きを三間（約５.４５m）以内に抑えよという「三間梁規制」に順守しているように見せるため、下の部分は庇で屋根は上の部分だけという説明をしたようだ。柿葺きの錏屋根という表現がわかり易いかもしれない。

２０P上左：勝興寺の鼓堂。２０P上右：経堂。２０P下左：大広間。

２０P下右：書院から撮影した奥書院。上下に分かれた錣屋根になっている。

２１P上下：唐門。檜皮の質感と唐破風の曲線が美しい。

檜皮葺きは、岩崎寺の雄山神社の本殿と勝興寺の唐門だけだが、柿葺きは他に氣多神社の本殿と埴生護国八幡宮の本殿や拝殿で用いられている。

氷見市中田にある道神社の拝殿も柿葺きになっている。この拝殿は、元は石動山天平寺の開山堂だった建物を、明治維新の神仏分離後に中田村が買い取ったもの。

建造物ではないが、２０１９年の４月に富山の職人がかかわって製作し高野山の金剛峯寺に奉納された唐櫃が檜皮葺きだった。この唐櫃の製作は、勝興寺の作業場で行なわれていた。

２３P上：国の重要文化財になっている氣多神社の本殿（写真左側）。
２３P下：埴生護国八幡宮の社殿も、国の重要文化財に指定されている。本殿、幣殿、拝殿は柿葺きになっている。
２４P上：中田の道神社。
２４P下：富山の職人もかかわって製作され、金剛峯寺に納められた唐櫃。

## ◯入善町上野の塞の神まつり

入善町上野の邑町地区に伝わる行事、塞の神（さいのかみ）まつり。この行事も左義長のようだが、櫓を燃やす前に塞の神と呼ばれる木の人形を持った子どもたちが地区の家をまわり、塞の神の歌を唄って祝儀として米や大豆、そして左義長で燃やす正月飾りなどを集めてまわる。これも一種の門付けだろうか。

塞の神については、昔、村境にあった川に木偶（デク）人形が流れ着き、祟りを畏れた村人が人形を焼いて無病息災を願い塞の神を祀ったと言われる他、コレラが江戸時代に流行った際、川から流れ着いた木偶人形を燃やしたところコレラの流行が収まったことから続けられてきたなど、そのいわれは諸説あるようだ。

デクサマと呼ばれる木の人形は左義長で燃やすので、毎年作り替える。塞は遮るという意味があり、塞の神＝デクサマを最後に燃やすことで悪霊や災が地区内に入らないように願っていると考えられる。

２６P：デクサマ。男神は９寸、女神は８寸５分となっている。親方と呼ばれる年長者が持ち、拍子木のように叩いた後に、全員で「塞の神まつりの歌」を唄う。

「塞の神まつりの歌」
さいのかみじゃ　おおかみじゃ
じいにも　かあにも　ぼくぼくじゃ
らいねんもきゃ　じゅうさんじゃ
にょうぼう　うんだら　しょうぶした
おとこうんだら　そ　そ　そだて

２７P上：８時に邑町公民館に集合して、先ずは全員で「塞の神まつりの歌」を練習。
２７P下：８時半に公民館を出発。公民館の前の家からスタートし、親方がデクサマを２回叩いた後、「塞の神まつりの歌」を唄い、家の人からご祝儀と左義長で燃やす正月飾りを受け取る。ご祝儀と一緒にお米や大豆をもらい布の袋に入れ、お返しにポン菓子を渡す。子供達全員揃って入るのは最初の家だけで、この先は小学校高学年中心と、低学年中心の二手に別れて家をまわる。写真は高学年組で、右端の親方が手にデクサマを持っている。

２９P上左右：塞の神の石碑。子供達が家をまわっている間に、大人達が石碑の横に左義長の櫓を造る。

２９P下：櫓の下部には藁を敷き、ここにデクサマを置いて燃やす。

３０P：こちらは低学年の子供が集まった組で、大人が付き添っている。デクサマの代わりに拍子木を持ってまわる。

３１P：完成に近づいた櫓。子供達が集めた正月飾りは金属やプラスチックなどを外してから櫓に取り付ける。

３２P上下：子供達の家まわりが終わると、デクサマを藁で包み、お米を入れた包み紙と一緒に櫓に入れる。

３３P：子供達が櫓に点火。

３４P上：櫓が燃えている間、子供達が「塞の神まつりの歌」を繰り返し唄う。竹の節がはじける”バン”という音が大きいほど災厄が払われるそうだ。

３４P下：櫓が燃えると、子供達は公民館へ戻りカレーの昼食。この後、家々で貰った祝儀が子供達に分配される。

## ○宝徳寺の寒中水行

氷見市にある日蓮宗のお寺、宝徳寺では、毎年１月１３日から１９日までの１週間「開運厄除星祭寒祈祷会」が営まれ、その期間中は毎日１３時３０分より高野本亘副住職が境内で寒中水行を行なう。下帯姿の副住職が桶に汲んだ冷水を被り、除厄や学業成就などを祈願する。この寒中水行は１９４９年（昭和２４）に前住職が始めたそうだ。

星祭祈祷会とは個人の災難を取り除き、寿福増進（喜び多く楽しい暮らし）のために星を祀って供養する法会。何をやっても上手くいく、逆に何をやっても失敗する時に「星廻り」が良い悪いと言い表すことがある。一年ごとに巡ってくる運命を左右する星を供養して、個人の一年間の健康と幸せを願うお祭りだ。星祭は日蓮宗に限らず、多くの宗派で行なわれている。

１９日の最終日にはぜんざいが振る舞われ、厄除けのお札が渡される。

and more...